

クワイン ホーリズムの哲学

丹治信春 (平凡社 2009)

19 クワインによれば、「性質」とか「命題関数」といったような「内包的存在者」は集合のよ
うな「外延的存在者」とは違って、その同一性の基準がはっきりしない。内包的のものを個
別化するためには「意味」の同一性に頼らなければならないが、しかし「意味」の同一性が、
はっきりしたものではないのである。

クワインは内包的な概念について懐疑的である。

27 「言語論的転回」(linguistic turn): 哲学的問題は実は世界の在りかたに関わるのではなく世
界について語る際にわれわれが使っている言語に関わるものである。

32 クワインは本格的に古典的哲学と格闘する経験が哲学をはじめの前になかったであろう。(哲
学史の講義はたまらなく苦痛であった。 p91)

1. カルナップとクワイン

37 カルナップは、哲学とは「科学の論理学であり、科学の論理学とは、科学言語についての構文
論 (syntax) である、というテーゼをうち出した。

39 クワイン: 「いずれにせよ彼 (= Carnap) は、われわれが哲学に帰属させているものの大部分
が、構文論の中で厳密かつ明確に扱えるのだ、ということを決定的に示したのである。」

41 構文論的術語: 妥当性が意味を離れて決まる術語。すべての術語がこのようなものであるわ
けではない。

46 哲学者達は通常「数」とか「物」といった表現についてではなくそのような表現によって呼
ばれる対象そのものについて語っている(実質話法)つもりでいた。しかしカルナップによれ
ば彼らは実は「数」とか「物」という表現について語っていた(形式話法)のだ。つまりこれ
らの表現の持つ構文論的な特徴だけによって真偽が決まるような言明をしていたのである。
これが形而上学的混乱の本なのである。

47 「A は不可能である」という言明は構文論的規則について語っているのであって可能世界に
ついて考えていると悩む必要はない。

49 構文論的規則は言語に相対的である。どのような規則でも好きに使っていい、それは規約の
問題である(寛容の原理 principle of tolerance)。

50 この観点からすれば、たとえば物体的対象の存在をめぐって、「物体は認識者と独立に存
在する」と主張する「实在論者」と、「物体とはセンスデータからの構成物に過ぎない」と
主張する「現象主義者」との対立は、「物-語」を原初記号とするような言語を採用するか、
それとも「物-語」は「センスデータ-語」を使った定義によって導入されるような言語を採
用するかという言語の任意の選択の問題にすぎない。

52 結局のところ哲学の問題とは言語の恣意的な選択の問題、われわれ自身による言語的取り決
め、「規約」の問題なのだ。

54 分析的命題: 真偽がそこに表れる言葉の意味だけで決まるような命題。そうでないものを「総
合的命題」という。カントによる。カントは a priori な総合的命題が存在することを認めた

(たとえば数学の命題). しかし, Principia の立場では数学は論理学に帰着するのですべての a priori 命題は分析的となる.

61 「猫」のような経験的言葉も「われわれが真とみなすすべての命題を言語的規約としての定義と見做す」という基本方針によれば命題はすべて分析命題になる.

63 クワインによれば一般的で重要な科学法則は度はそれを定義に組みこむことで分析命題にすることは馬鹿げたことではない. たとえば「自由落下」自由落下の法則をその定義と見做す. 規約主義者ポアンカレはニュートンの三法則を力とか質量の定義としての言語的規約だという考えを積極的に擁護していた.

67 クワインが挙げたもう一つの例はアインシュタインの同時刻の定義である. 経験命題と思われるものを分析命題に格上げしている.

68 われわれは法則に先立って言葉を理解しておりその理解に基づく経験的な探究の結果としてそれらの法則を受け入れるのでなく, 法則を受け入れることでその法則に表れる言葉の理解が成立するのである. このような考えは, のちにクワインの「ホーリズム」と呼ばれる考えへの重要な布石になっているように思われる.

[C] しかし, 言葉の世界と現実の世界を対応させるぎりぎりの所に動き得ない生物学的アダプターが与えられているということを忘れてはならない.

69 のちのクワインの考え方では, むしろ厳密な科学, 高度に理論的な科学においてこそ, 典型的に, 言葉の「意味」とか「定義」について語るができない, ということになる.

76 論理的真理は規約に由来するという考えには困難がある. 困難のもと論理的真理はむげに多くあるということである, そこで「公理系」と「推論規則」でこれを統御しなくてはならない. しかし, 「規則に従うこと」がどういうことか実は判然としない. Lewis Carroll が最初に指摘し, Wittgenstein が強調したとおり.

82 論理を規則から引き出すためには論理が必要である. 論理の全体を規約から引き出すことはできないのである.

84 「規約によって真である」あるいは「分析的である」ということと「強固に受け入れられている」あるいは「明白である」ということはどれほど違うのかという疑念はくり返し表明される. そしてまた, 「行動主義的に考えたとき違いがあるか」

2. ホーリズム

96 「経験主義の二つのドグマ」: ここで経験主義とは論理実証主義のことである. 第一のドグマは分析的真理(事実とは独立に意味に基づく真理)と総合的真理(事実に基づく真理)との間にある根本的区別があるという信念. 第二のドグマは還元主義, すなわち有意義な言明はどれも直接経験を指示する名辞からの何らかの論理的構成物と等値であるという信念.

97 この二つのドグマを捨て去ることからの二つの帰結としてクワインは「思弁的形而上学と自然科学との間にあると考えられてきた協会がぼやけること」および「プラグマティズムへの転換」をあげる.

98 分析的命題が意味をもつ前提は「同義性」(意味が同じということ)という概念が意味をなすということである.

- 101 「独身者は結婚していない」も論理命題と同じく分析命題ではある。
102 普通にいわれる同義性は定義によるとされてもそもそも定義は同義性を前提に構成されてい
ることが多く循環している。(まとめ p107)
- 112 クワインの批判の焦点は一つ一つの命題が単独でつまり他の諸命題とは無関係に、毛陰証され
たり反証されたりするという考え方そのものに当てられる。「外的世界についてのわれわれ
の言明は、ここ独立にではなく、一つの集まりとしてのみ感覚的経験の審判を受けるのだ。
」これはデュエムが物理の内部で主張したことの一般化である。
- 115 何が何の確認や反証になるかは、その特定の経験の仮説を取り巻く「理論的環境」とでも呼
ぶべきもの、すなわち、人々が他のどのような信念を持っているのか、ということと相対的に
しか決まらないのである。
- 116 クワインによれば、「地理や歴史についてのごくありふれた事柄から、原子物理学、さらには
117 純粋数学や論理に属するきわめて深遠な法則に到るまで、われわれのいわゆる知識や信念の
総体は、縁に沿ってだけ経験と接する人工の構築物」をなしている。「私が主張したいのは、
一つの不都合な経験を取り込むのに、体系全体のさまざまな部分に対するさまざまな再評価
の仕方のうち、いずれによってもよいということである。
[C] たとえとして悪くはないかも知れないが偏微分方程式の境界値問題に譬えて考えれば
PDE にあたるものがいるのである。内部での整合性がいいとか悪いとか如何に判断するか、
そうそう勝手にはならないと考えるべきだろう。さらに境界の次元は何か。経験の次元がき
わめて高次元であることを考えると境界の効果は絶大であり得る。
- 118 理論の内部構造もただ一つに決まるとは言えないのである。
119 このような話は理論的な科学については説得力を持つかも知れないが、もっと日常的な、机と
か家とかについても言えるのだろうか。「この部屋に机がある」というようなありふれた命
題は、他の命題に関係なくそれ単独で、「一定範囲の経験に対応している」のではなからうか。
だがクワインによれば、そのように見えるのは、いわばわれわれの「怠惰さ」の故に過ぎ
ない。つまりわれわれは、信念体系の全体をできるだけ乱さないようにしようとする「保守
主義」と呼ぶべき「自然な傾向」を持っているのである。
- 120 「いかなる言明についても、もしわれわれが、体系の他の部分に抜本的な変更を加えるならば、
何が起ころうとも、等の言明を真と見なし続けることができる。」(「論理的観点から」p64)
123 物理亭対象も、ホメロスの神々と同じく、「文化的措定物」という身分、つまり「われわれの
文化においては存在するとされているもの」という身分を持つに過ぎない。そして「物理的
対象の神話が他の多くの神話よりも認識論的に優れているのは、経験お流れの中に扱いやす
い構造を作り出すための道具として、他の神話よりも効率がよいことがわかっている、とい
う点においてである」(「論理的観点から」p66)
- 124 われわれの科学も一種の神話のようなものだ、という考えからすれば、科学と形而上学とを
明確に分離するという論理実証主義のもくろみが不可能となることは避け難いであろう。
- 125 「二つのドグマ」においてクワインは、「いかなる言明についても、もしわれわれが、体系の
他の部分に抜本的な変更を加えるならば、何が起ころうとも、当の言明を真と見なし続ける
ことができる」と主張した。そしてまた、逆に、いかなる経験が生じようと決して改訂されるこ

とがありえない, というような特権的命題(分析的でアプリアリな命題)は存在しないとも主張される。「感覚的経験の審判を受ける」のは, たくさんの命題の「集まり」であり, 論理や数学の命題や, その他の「分析的」とみなされてきた命題も, 他の諸命題と一緒にその「集まり」の中に含まれている。そして「感覚的経験の審判」の結果, 青の集まりには誤りがある, と判明した場合, 可能なさまざまな改訂の仕方の中には「分析的」とみなされてきた命題を否定する, というやり方もあるのであって, それは他の諸命題と身分上同等なのだ, というわけである。

128 論理や数学が「必然的真理」と感じられるという事実はどう説明されるのか。この問に対しては, まず, 論理や数学にも改訂は及びうるのだ, 答える。そしてその上で, それにしても論理や数学の命題が, 他の命題に較べて改訂に対する抵抗力が強いのはなぜか, と問われれば, それはわれわれの「保守主義」によることだ, 答えられるであろう。

129 われわれの信念体系の内部をかたちづくる理論的な部分は, 経験を通して世界から「与えられる」ものというよりもむしろ, われわれが「作る」もの, 「人工の構築物」なのである。この考え方からすればわれわれの「認識能力」の重要な部分は「創作能力」だ, ということになるであろう。

130 ホーリズムは一つ一つの命題の意味はその検証の方法として決まる, という「意味の検証理論」を否定するだけでなく, そもそも「言葉や分にはそれぞれ一定の意味がある」ということを, 否定するのである。

131 「神話」として一つの信念体系を受け入れている, ということが, そこに等乗する言葉の「理解」を構成するのであり, 近似的に等しい信念体系を持っている人々は, まさにその故に, 円滑なコミュニケーション行なうことができるのだ。

132 意味を決める定義でも分析的命題でもない「信念群」が, ことばの「理解」を支える, という考え方が, ホーリズムの最も画期的・特徴的な点である。

135 ホーリズムは言語の撰択と, その言語の中での理論の撰択との区別を否定する。われわれが習得する言語には既に「神話」として前の世代の信念体系・理論体系が組みこまれておりそれが「理解」を成り立たせているのである。したがって, 信念体系・理論体系に対する改定の作業はまた, 言語に対する変形の作業でもある。そしてさまざまにあり得る改訂の仕方の中でどれを選択するかについての考慮は「合理的であるとするかぎりプラグマティックなものなのだ」というのがクワインの考えである。

3. 翻訳の不確定性

155 言語は社会的・公共的なものであるという, ある意味あたりまえのことの確認から引き出すべき第一の教訓は心理主義的な言語観の否定である。言葉が正しく理解されているかどうかは人の心の中でそのことばをどのような観念に結び付けているかによってではなく, むしろ「心の外で」その言葉をどのように使うか, その言葉を含むどのような文を肯定しまた否定するか.. といったその人の言語的振る舞いによって決まる。

158 ホーリズムの保守主義は単に偶然的なものではなく言語が機能し続けるために本質的条件となる。

162 ある言語を別の言語に翻訳するためのマニュアルは種々の異なった仕方でもそのすべてが発話への傾向性の全体と両立するがしかし互いには両立しない仕方でも、作ることができる
(「言葉と対象」p42)

176 観察分も理論負荷性を持つ。